

今年も残すところあとわずかとなりました。この機関誌が皆さんのお手元に届く頃には、いよいよ 2000 年になっていることでしょう。確かつくば万博で 2000 年に手紙が届くタイムカプセルがありました。あれがもう配達される時期になったのかと思うと驚きです。

さて、「構造生物」の創刊から 5 年の月日が経過しました。その内容を振り返ってみると、あまり編集方針に一貫性がなく、何となくおもいつくままにさぎょうを続けていたような気がします。皆さんの意見を汲み上げることがなかなか難しいことなので、基本的には編集委員が知りたいと思うことを読者も知りたがっている、という方針で進めてきました。そのため、多少扱う題材に偏りが出ているかもしれませんが、ご容赦願います。

現在、来年に (2000 年) 取り扱いたいテーマとして考えているのは 1) 放射光施設と 2) Proteomics です。Spring-8 のビームラインも軌道にのり始め、先日の結晶学会でも Spring-8 で測定されたデータを使った八票が多々見受けられました。良い機会ですから、Spring-8 や他の放射光施設についても紹介できればと思っています。またご存知のように、最近ヒト 22 染色体の全遺伝子が決定されるなど、ヒトゲノム計画は予想以上の速度で進んでおり、得られた遺伝子情報をどのように利用していくか、というのが医学をはじめ各分野で非常に重要な課題となっています。実際に病態に関連するのは、翻訳された蛋白質レベルでの変化ですので、Proteomics は今後の製薬業界において非常に重要な位置を占めるのではないのでしょうか。これらの分野に構造生物学がどのように関わっていけるかについて考える材料を提供できたらと思います。

最後になりましたが、佐々木先生らのご尽力により、本誌バックナンバーのインターネット版が作成されました。どうぞご参照下さい。

(栗原)

===== 編集委員 =====

委員長	石川 弘紀	(味の素)	clm_ishikawa@te10.ajinomoto.co.jp
委員	栗原 宏之	(山之内製薬)	kurihara@yamanouchi.co.jp
委員	曾我部 智	(日本ロシュ)	satoshi.sogabe@roche.com
顧問	田仲 可昌	(筑波大)	ytanaka@sakura.cc.tsukuba.ac.jp